

- 9) 佐々木秀美著：ナイチンゲールの看護・福祉思想—「カイゼルスウェルト学園によせて」を手掛かりに、看護学統合研究 Vol.18, No.2, pp.14-34, 2017年。
10) 佐々木秀美著：ドイツにおけるディアコニッセ養

成がナイチンゲールに与えた影響について、看護学統合研究 Vol.1, No.1, pp.10-21, 2017年。
(令和元年12月六史学会合同例会)

野中家蔵書中の浅田宗伯関係書籍について

青木 歳幸

本稿は、2019年12月21日の六史学会での報告要旨である。史料所蔵者の野中家は、初代源兵衛が寛永3年(1626)に薬種業を創業し、現在はウサイエン製薬会社として製薬業を続けている老舗である。

佐賀大学地域学歴史文化研究センターでは、平成25年(2013)10月17日から、野中烏犀圓文庫の古医書・国書・古文書調査を開始し、文部科学省科研費B「佐賀藩薬種商・野中家資料の総合的研究」(2016~2019)に採択され、平成31年に仮目録をまとめ、報告書を出版した。

科研費の調査により、野中烏犀圓文庫のおよその蔵書数が把握できた。文書1271点、国書763部、医書1279部の計3313点を目録化でき、現在補充調査と書画類の調査を進めている。本報告はその調査で得た知見の一つである。

浅田宗伯(1815~1894)は、信濃国筑摩郡北栗林村(現松本市島立)出身で、幕末・明治にかけての代表的な漢方医である。慶応2年(1866)、徳川將軍家の典医となり、維新後も天璋院篤姫らを診療した。その明治3年(1870)の診察記録『御殿診籍』が野中家に現存している。それが③の診療記録である。

浅田宗伯関係書籍研究は、矢数道明氏の研究(『近世漢方医学史』379頁、東京・名著出版、1982)があり、真柳誠「浅田宗伯の著述とその所在」(『漢方の臨床』37巻9号1055-1062頁、1990年9月、2018/03/09修補)が、網羅的で道しるべとなる。

今回の調査で、野中家蔵書のなかから以下の書籍を確認しえた。番号は所蔵箱番号。

- ①, 30-3-1と3-2, 医心方, 乾29冊・坤20冊, 天保10年(1839)から天保13年にかけての宗伯筆写本。
- ②, 23-02, 傷寒弁術, 1冊, 弘化2年(1845)。刊本。
- ③, 東3-1, 御殿診籍, 2冊, 浅田宗伯, 明治3年(1870), 帙題簽に「浅田宗伯自筆控」とある。写本
- ④, 13-18, 古方薬議再稿, 2冊, 浅田宗伯, 浅田宗伯自筆稿本, 写本。
- ⑤, 45-9, 古方薬議・古方薬議續録全, 6巻6冊, 浅田宗伯(自筆本)
- ⑥, 6-4, 皇國名医伝, 3巻3冊, 浅田宗伯, 明治6年(1873), 刊本。
- ⑦, 6-5, 皇國名医伝前編, 3巻3冊, 浅田宗伯, 明治6年(1873), 刊本。
- ⑧, 23-26, 医学智環, 1冊, 浅田宗伯, 明治11年(1878), 刊本。
- ⑨, 59-7, 先哲醫話, 2巻2冊, 信濃 浅田惟常著 松山挺剛校, 明治13年(1881)8月, 刊本。
- ⑩, 23-7, 傷寒翼方, 1冊, 浅田栗園著, 明治14年(1881), 刊本。
- ⑪, 84-2, 牛渚漫録元, 1冊, 栗園先生(浅田宗伯), 明治25年(1892), 刊本。
- ⑫, 32-8, 後芻言, 1冊, 浅田宗伯, 明治28年(1895), 刊本。
- ⑬, 33-11, 浅田宗伯処方全集, 2冊, 世界文庫刊本会, 昭和3年世界文庫刊本会刊(1928)

①の『医心方』は、乾29冊、坤20冊あり、浅田宗伯が、仁和寺本をもとに、天保10年(1839)から13年にかけて筆写したものである。例えば

巻七の末尾に「信濃 後学 浅田惟常 識此甫校写、医心方第七 時己亥九月晦日卒業于江都勿誤薬室」とあり、天保10年(1839)に『医心方』第7巻を筆写しおえた。巻一の末尾には「信濃 後学 浅田惟常 識此甫校写 時壬寅春三月念七夜」とあり天保13年(1842)に『医心方』第1巻を写し終えている。筆写時期は天保10年から13年にかけてであった。宗伯の25歳から28歳にかけての仕事であった。なお、『医心方』については、①のほかに、30-1、『医心方』、5冊、昭和10年(1935)、影印複製本と30-4-1と30-4-2の『医心方』、30冊の写本(筆写者不明)があり、後者も注目されよう。

③東3-1、『御殿診籍』は2冊で、帙題簽に「浅田宗伯自筆控」とある。詳細は、青木歳幸・野中源一郎「御殿診籍」(ISPS科学研究費基盤研究(B)成果報告書『佐賀藩薬種商・野中家資料の総合研究—日本史・医科学史・国文学・思想史の観点から』(佐賀大学地域学歴史文化研究センター、2019年)を参照されたい。1冊目の表紙をめくると最初に「庚午正月 勿誤薬室知事」と記され、おろせという女中の診察記録があり、最後

の本寿院まで延べ96人分の患者が記されている。2冊目には延べ105人分の診察がある。松御殿御局(天璋院)の処方例は、「一 松御殿* 御局様 当分之内内薬 導滞通経湯 蘊要柴葛解肌湯 芥夏 中大 柴葛芍少」などである。これらの分析により、浅田宗伯の幕末維新期の処方の実際や、大奥の女性だった彼女らの病状などをうかがうことができよう。

ほかに、②『傷寒弁術』、⑤の45-9、『古方薬議』・『古方薬議續録全』、⑨『先哲医話』、⑩『牛渚漫録元』等につき、写真で紹介した。

報告を終え、質疑に入り、小曾戸洋氏から『古方薬議再稿』は題簽に浅田宗伯自筆本とあるが疑義があること、②『傷寒弁術』の「甫庵蔵書」印は、服部甫庵ではないかとの指摘があった。照合したところ、服部甫庵の蔵書印であることが判明した。以上から野中家所蔵浅田宗伯関連書籍は、服部甫庵所蔵書の系統もあることが判明し、今後、他館所蔵の宗伯関連書籍との厳密な校合と、野中家への入手経路の研究もさらに必要となった。

(令和元年12月六史学会合同例会)

ヴィクトリア時代イギリスにおける医師資格 ——高木兼寛の場合

永島 剛

明治の海軍軍医にして慈恵会医科大学の学祖である高木兼寛(1849-1920)は、1875(明治8)年からロンドンのセント・トマス病院医学校に留学した。1892(明治25)年版の『日本博士全伝』によると、高木は留学から3年目の1878(明治11)年4月に「外科学学校メンバシップ」のディプロマを、同年7月には「ロンドン内科学学校」より「ライセンスエード」のディプロマを取得。さらに1880(明治13)年5月、「外科学学校」からフェローシップのディプロマを受領して帰国の途に就いた、とある。本報告では、高木が取得したこれ

らの医師資格がどのようなものだったのかを理解するために、19世紀イギリス(おもにイングランド)における医師資格制度の展開を概観した。

医師資格のあり方は、医史的にはもとより、「医業」「医療市場」の規制に政府がどう関与したのかという点にも関わり、経済史的にも興味深いテーマである。

イングランドでは、内科医(physician)は大学が養成機関となっており、実践的な技術よりも書物を通じた理論的教育に重きがおかれていた。オクスフォードかケンブリッジの大学医学部を卒業